

## 『海蛇と珊瑚』について 加古陽

「待望の」と銘打って、第一歌集が送り出されることがしばしばあるが、手前味噌のキャッチフレーズではなく、本物の待望の第一歌集が出た。二〇一二年の角川短歌賞で、四人の選考委員が全員一位に推して受賞した数内亮輔の『海蛇と珊瑚』である。

巻頭には受賞作の「花と雨」五十首が並ぶ。最初の一首へ傘をさす一瞬ひとはうつむいて雪にあかるき街へ出でゆくを説くだけで、作者がただものでないことが分かる。傘を差すとき、人が一瞬うつむくところを切り取る観察力、「雪に明るき」という表現力。そして一首を通じて作爲の跡を見せないさりげなさ。巻末の跋文で、永田和宏が書く通り「しみじみといい」歌である。

「花と雨」にはほかにもへきらきらと波をはこんでみた川がひかりを落とす橋をくぐりぬへ電車から駅へとわたる一瞬にうすきひかりとして雨は降るといった鋭く、丁寧な観察力が光る歌が並ぶ。そうした静謐さの中から近しい人の死と、その最期を看取れなかったことへの深い悲しみと、臓腑の底でたぎる感情が伝わってくる。タイトル作で、受賞の前年に角川短歌賞次席になった『海蛇と珊瑚』も似たテイストを持つ、質の良い歌が多い。

これらの歌群を見ると、帯文に岡井隆が書くように、数内は『アララギ』文明系のリアリティ重視の潮流の先端に立って」といえる。数内自身「自然詠（自然や周りのモノについて詠うこと）

の流行らない時代だ。くだらない人間関係の歌ばかりが無駄に多い」と嘆き、「私の作歌技術の基礎は自然詠・写生である」と、今でも思う（『短歌』二〇一八年四月号）と述べている。

数内によれば「そのままを写すことは『見る』ではない」。見て把握したものを手掛かりに「新たな虚構を作り出す力」を生み出すこと。それが「見る」という行為である。「虚構」と言い切ると表現の範囲を狭めてしまうように思うが、「新しい世界」とか「見たこともない絵」と捉えれば、しつくりくる。確かに「花と雨」などは、一首と連作の力で一つの世界を生み出している。

だが、全体として見たときに、この歌集は違った色彩も帯びる。第二部は実験的な作品が多いが、新しいものを創り出そうという意識が強すぎるのか、やや空回りしているようだ。福島原発事故に想を得たとみられる「愛について」を例にとれば、「放射線量は距離の二乗に反比例する。おそらく、愛も」と詞書が付された（致死量の愛、其れはすなはち一〇ベクレル、もちろんわれも死に至るなり）をはじめ、多くが「精緻に頭の中で考えた歌と詞書」に見え、「新たな虚構を作り出す」には至っていない。

それに続く「適当な世界の適当なわたし」は口語を多用し、露悪的に現実世界との「ずれ」を詠んでいるが、どうせならラップミュージックのように韻を踏むなど、大胆さがほしい。散文詩のような「私のレッスン」も手つきが見えて、つまらない。

このように連作と歌ごとの出来にばらつきはあるが、それでも『海蛇と珊瑚』は詠むに値する。ほどほどの完成ではなく、失敗を覚悟で高みを目指した作品集だからだ。作者にとつて、この一冊は始まったばかりの旅の「最初の里程碑」にすぎないだろう。